

## スタイル

東京：スタイル社、1936—1952

宇野千代が編輯した本誌の創刊は1936年で「装苑」と同年。主に洋装および和装の写真、俳優の訪問記、化粧法、小説や随筆などの読み物、流行、男性のおしゃれ、音楽、料理、デザイン画が載り、洋服製作のための製図も掲載されている。復刻版は1936年6月号から1941年9月号まで臨川書店から刊行されている。戦前に出版されたオリジナルは、触れるだけでポロポロと破れたりしてコピーが困難なほど酸化が著しい。戦前のファッションの動向を知るうえで資料価値の高いものだけに復刻は非常にありがたい。

創刊号では、マレーネ・デートリッヒが朝の目覚めの服として、白いパジャマの上に、目の覚めるようなベルベット地に白のコードで大柄な模様を描いたガウンを着こなした写真が使用されている。その他、「10 A.M.」として午前の服が5体、自転車、乗馬、テニス、水泳、スキーなどスポーツウェアが18体、エレガントな大人っぽい午後の洋服が6体、そして「夜風に薫る」として夜会服が6体、さらに帽子、化粧法の説明にそれぞれハリウッドの女優たちの写真が扱われ、さながら外国のファッション雑誌のようである。日本婦人の洋服着用率が平均26%（1937年「婦人之友」6月号）であったことを考えると、このハリウッド女優の洋装が読者の憧れを誘ったことは想像に難くない。

しかし、洋服一辺倒だった誌面が2—3年経つと次第に和装も掲載されるようになり、1938年7月号の巻末には「皆さんこのスタイルをお讀みになつたあとは戦地の兵隊さん達に送つて上げて下さい」と記され、次第に戦争の影が誌面からも読み取れるようになる。1939年11月号以降、表紙のイラストが下駄、羽織紐、お針箱、和鉢、百人一首のかかるた、桜の花びらなど和風一色に変わる。そして内容も日本人の洋服着用者とともに和服着用者も多く登場し、アメリカの銀幕スターたちが着こなす洋服のページが減少する。洋裁のコーナーが「廃物講座」のタイトルになり、宇野千代による「私は古着が好き」（1939年11月号）、早見君子の「物に廃物なし」（1939年12月号）、藤原あきの「古着も生きもの」（1940年3月号）、宇野千代の「古着一枚で洋服二着」（1940年8月号）など、廃物利用の工夫が写真入りで紹介される。続いて、当時のドイツ、イタリアの勇敢な女性たちを登場させるようになり（1940年9、10月号）、本誌のサイズはA4判変型からB5判に縮小された（1940年12月号）。服作りは「婦人国民服試案」（1941年9月号）に及び、まさに第二次世界大戦下の国情を反映した内容である。しかし、戦中の非常事態であっても、残布でカラーやカフスの製作（1941年3月号）、身頃と袖の配色が異なる継ぎ接ぎの布の工夫（同年9月号）など、布を無駄にしないデザインの創作が「スタイル」らしい。さらに、「スタイル規格型」と称して毎回異なる1—3体のデザインを15回発表している。

後に宇野千代が1941年の頃を述懐して、戦地にいた当時の夫の北原武夫に宛てた思慕をつづった恋文が掲載され、戦地に送る慰問袋用としてよく売れたと語っている（「男子専科」1984年1月号）。さらに、1941年10月号から1944年1月号まで、「スタイル」から「女性生活」に改題されるが、戦況の悪化によって廃刊を余儀なくされた。そして終戦後の1946年に再び「スタイル」の誌名で復刊さ

れるのである。

創刊号から1936年10月号までの5回にわたり、表紙のイラストを藤田嗣治 (1886-1968) が描いていて興味深い。宇野は1984年1月号の「男子専科」で、創刊号のそのイラストについて、「藤田嗣治が、マドレーヌと呼ばれていたその妻の似顔絵を線描きした。ピカピカのエナメルを塗ったような黒地のアート紙の大判の表紙が、人々の意表をついた」と記している (図参照)。同年の7、8、9、10月号のイラストは、藤田独特の乳白色の顔をした女性が描かれ、優美な魅力を醸し出している。戦前の表紙画は主に松井直樹によるが、戦後の1946年4月号からは高野二三男によって欧米人女性の顔が誌面いっぱいに描かれ、戦前の表紙イラストとはがらりと雰囲気が変わる。また、グラビア写真では創刊当初のようにアメリカ人女性の写真が使われ、化粧法や髪型の解説コーナーにもモデルとして登場し

ている。戦後、日本人女性の日常着が一斉に洋服になったことから、これらのデザインや着こなしが実用的な手本にされたであろうことは想像に難くない。

しかし、1947年以降、本誌は次第に日本人による洋装の写真が主になり、洋裁のための製図が毎号掲載され、製図の解説や読者の服作りに対する質問に応えるコーナーも設けられている。戦後の洋裁ブーム期、一般の日本人女性が自力で洋服を製作するようになったことがうかがい知れる。

男性のおしゃれについてもコーナーを設け、原奎一郎や由利四郎が解説している。1952年4月号では、「若き男女の実用お洒落雑誌！」と目次でうたっており、男性読者もターゲットにしていることがわかる。

1984年1月号の「男子専科」で、特別企画として「スタイル」創刊号の復刻版を載せ、「約半世紀を経た今日なおそのまま通用する豊かな“感性”が全ページに脈打っている」とコメントを付すとともに、「男子専科」は、「スタイル」を母体として1950年に臨時増刊号として登場したことを記している。

(藤田恵子)



創刊号 (1936年6月号) の表紙 藤田嗣治による